様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２５１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０４０８３

研究課題名（和文）筆記具の持ち方の指導法改善に関する基礎研究―日本と欧州の比較を通して―

研究課題名（英文）A study on the holding pencils in 1st grader in Japan and Germany

研究代表者
小野瀬　雅人（ONOSE, Masato）

聖徳大学・児童学部・教授

研究者番号：４０２２４２９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、小学校国語科における「文字を書くこと」の指導事項である「筆記具の持ち方」の基礎研究として、教科書の「正しい持ち方」が定着しない原因を解明し、今後の学習指導の改善に資することを目的とした。日本の小学校1年生39名とドイツの初等学校1年生118名、2年生41名を対象に調査した結果、「筆記具の正しい持ち方」は、日本35.9%、ドイツ人児童が大半の学校56.9%、移民児童が大半の学校で17.7%であった。教師による調査から、ドイツ人児童が大半の学校以外では、就学前からの塾や家庭での書字学習経験の影響が認められた。書字の入門期（開始時期）における指導法の検討が必要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：Only about 30% of 1st grader in Japan can hold pencils correctly. The purpose of this study was to investigate "how to hold writing instruments" at 1st grader in Japan and Germany. Because, Germans have a belief that they should learn how to write letters after entering elementary school. The subjects of the investigation are as follows, 39 1st graders in Japan, 118 1st graders and 41 2nd graders in Germany, and their teachers. The results of investigation on the percentage of children who hold the pencil correctly are as follows , 1st graders in Japan ：35.9%, 1st and 2nd graders in Germany (immigrants) ：19.0 %, 1st graders in Germany ：56.9% , 1st graders in German (living in Japan)：20.5%. The result of the interview with teachers showed that both German children (immigrant) and German children (living in Japan) were learning how to write letters before entering school. These results were discussed from the viewpoint of the period of regular guidance on writing of letters.

研究分野：教育心理学

キーワード：筆記具の持ち方　国語科　書写　指導法

１．研究開始当初の背景

（1）本研究の背景

日本における文字の「手書き」、つまり「書写」の指導について、平成 29 年（2017 年）告示の学習指導要領の「第二章　各教科　第 1 節　国語」の〔第 1 学年及び第 2 学年〕「書写」の事項をみると、「筆記具の持ち方」について次のように記されている（文部科学省、2017）。すなわち、

「（2）書写に関する次の事項について指導する。（中略）ア　姿勢や筆記具の持ち方を正しくし，文字の形に注意しながら，丁寧に書くこと。」

しかしながら、教科書に示されている「筆記具の持ち方」を修得している者の割合は年々、減少しているようである。

本研究は、その背景を明らかにするため、書くことの指導を初等学校 1 年生（日本の小学校 1 年に相当）から体系的カリキュラムのもとで行ってきたドイツでの調査結果も踏まえつつ、文字を書く基礎・基本としての「筆記具の持ち方」の指導法改善に関わる資料を得ることを目的とする。

（2）児童の到達目標となる筆記具の持ち方と先行研究の成果

筆記具の持ち方は、書字活動の基礎・基本である。なぜなら、書字活動は筆記具を手先の指で支え動かすことによって実現するからである。そのため、日本以外の欧米の国々においても三面把握（tri-pod grip）、つまり筆記具を親指、人指し指、中指の 3 本で支える持ち方が書字の入門期（初めて書字の学習を始める段階）において指導されてきた。日本では小学校 1 年生の教室に写真や図が掲示され「正しい持ち方」の指導に力を入れている（写真参照）。

筆記具の持ち方に関しては、小野瀬（1996）が書字の入門期前にあたる幼児とそれを過ぎた小学校 4 年生児童を対象に調査を行っている。それによると、国語科（書写）の教科書に記載されている「正しい持ち方」は幼児では 4-5 歳児クラス 18.4%、5-6 歳児クラス 20.0%であった。他方、入門期の書字指導を受けた後の時期にあたる小学校 4 年生でも 24.6％に留まった。

写真　小学校 1 年生の教室における「筆記具の正しい持ち方」の掲示例（右図は拡大）

２．研究の目的

(1)先行調査を踏まえ、書字の入門期にあたる日本の小学生と書字が定着している大学生を対象に筆記具の持ち方調査を行う他、児童の担任教師と大学生にその背景となる要因を明らかにするための調査を行う。

(2)ドイツの初等学校 1 年児童と担任教師を対象に「筆記具の持ち方」と関連質問により「持ち方」の指導状況とそれに影響する要因を明らかにする調査を行う。

(3)日本とドイツの文化差も含め比較検討し、日本の書字指導改善の提案を行う。

３．研究の方法

(1)日本の大学生を対象とした筆記具の持ち方と筆記時の困難さの関連（研究１）

（目的）書字能力に習熟している大学生を対象に、講義でノートをとる際の筆記具の持ち方、及びその持ち方で書く際の意識、さらに筆記具を手に持ち書くことに関する考えを明らかにする。

（方法）調査年月：2015 年 9 月。調査対象：女子大学 1 年生 66 名。

調査内容　筆記具の持ち方：質問紙法による。質問紙は、小野瀬（1996）を参考に、5 類型に分類した持ち方の写真 8 枚（標準型

Ⅰ、標準型Ⅱ、亜形Ⅰ、亜形Ⅱを各１枚と、例外４枚）を印刷した質問紙を用意し、自分の持ち方を見て該当するもの１つを選択するよう求めるものである。現在の持ち方に関する認識：質問紙法により、現在の持ち方について、①開始時期、②書く際の意識、③書く機会、④子どもが書くこと、⑤自分が書くこと、を中心に回答するよう求めた。回答は選択枝法（その他（自由記述）を含む））とした。手続き：調査は大学の授業の後、集団で実施した。

（結果と考察）

筆記具の持ち方： 66 名の筆記具の持ち方を自己評定及びデジカメ記録で確認した結果を表１に示す。「教科書にある持ち方」（標準型Ⅰ）は 19.7%であった。

表1　筆記具の持ち方(日本)

	N	標準Ⅰ	標準Ⅱ	亜型Ⅰ	亜型Ⅱ	例外
大学生	66	13	15	27	5	6
2017.3	%	19.7	22.7	40.9	7.6	9.1

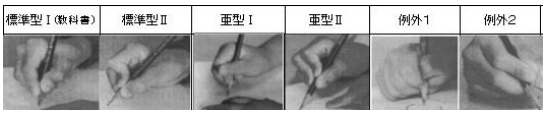

図１　持ち方の分類例（小野瀬、1996 に基づく）

質問紙調査の結果：

①現在の持ち方をいつ頃から始めたか、その時期（6 枝選択）：１位は「小学校低学年（１~３年）」で 50.0％であった。標準Ⅱの持ち方ではこの割合が 80.0％であった。２位は「覚えていない」で 22.7％であった。これらのことから低学年における持ち方指導の重要性が示唆される。

②現在の持ち方で書く（ノートをとる・メモをする）際に感じていること（５枝選択）：１位は「とくにない」43.9％であった。２位は「疲れやすい」24.4%、そのうち亜型Ⅰが約半数 43.7%を占めた。「正しい持ち方」以外の持ち方が手先の疲労に影響する可能性が示唆される。

③現在、筆記具を使って書く機会（複数回答）：１位は勉強（学習）するとき」92.4%、２位「ノートをとるとき」86.4%、３位「メモをとるとき」69.7%、4 位「日誌や日記を書くとき」66.7%であった。持ち方との関連はなかった。学校や家庭での学習活動では筆記具で書く機会が多いようだ。

④子どもが筆記具を使って書くことについて（５枝選択）：「必要」93.9%であった。学生の大部分が「子どもは筆記具を使って書く必要がある」と認識していた。これは自らの経験から書くことの重要性を理解しているものと考える。

⑤自分自身が筆記具を使って書くことについて（５枝選択）：「必要」88.4%で、学生の大部分が「自分自身にとっては筆記具を使って書く必要がある」と認識していた。しかし筆記具で書くことは「必要最低限にすべき」という回答も 6.1%と僅かながらみられた。子どもにとって筆記具を使う意味と大学生におけるそれとの間では若干の相違があることがわかる。

⑥筆記具を使って書くことについて（自由記述）：自由記述の回答は 28 名（42.4%）から得られた。その内訳は肯定回答 25 名、否定回答 3 名であった。肯定回答は筆記具を使って書くことで「集中できる」「記憶できる」「理解（整理）できる」「漢字を忘れない」というものであった。他方、否定回答は「持ち方が変なので疲れる」「ワープロがよい（文書を配布するとき、作文を書くとき（校正等で消すのが面倒））」というものであった。回答者 3 名の持ち方の類型は、亜型Ⅰが 2 名、その他が 1 名であった。このことから、筆記具の持ち方が「教科書」どおり修得されないと、筆記具を使って書くことに対して否定的な認識を持つ可能性があることも考えられる。

(2) 小学校 1 年（初等学校 1 年）の子どもを対象とした「筆記具の持ち方」の日独比較

ドイツでの書字学習は、日本の小学校 1 年に当たる初等学校 1 年から始まり、日本

の学習指導要領に相当するレールプランに基づき体系的な書字指導が行われている。

1) 日本の小学校１年児童における筆記具の持ち方（研究２）

（目的）小学校 1 年児童を対象に学年末時点での筆記具の持ち方を明らかにする。

（方法）調査年月：2017 年 1 月。調査対象：小学校 1 年生児童 39 名。公立小学校 1 年生 2 クラス約 60 名。調査内容・手続き：児童一人ずつＢ５判用紙に鉛筆で円を２回描いてもらい、筆記具をもつ手先の様子をデジカメで撮影する。

（結果と考察）

デジカメ画像を２名の研究者が独立に、小野瀬（1996）の基準に従い分類した。この結果は、小野瀬(1996) の調査結果と比べると、同様の傾向を示している。つまり「正しい持ち方(標準Ｉ）」以外の持ち方の子どもが多い。その背景として、従来より指摘されているように就学前からの学習塾や家庭での指導により「正しい持ち方」以外の持ち方が定着し、学校による指導で矯正が困難となっていることがわかった。

表2　筆記具の持ち方(日本)

	N	標準Ⅰ	標準Ⅱ	亜型Ⅰ	亜型Ⅱ	例外
小学校1年	39	14	8	9	3	5
2017.3	%	35.9	20.5	23.1	7.7	12.8

表3　筆記具の持ち方(ドイツA地域：Ludwigsburg)

	N	標準Ⅰ	標準Ⅱ	亜型Ⅰ	亜型Ⅱ	例外
初等1年	20	10	1	2	4	3
2016.6.16	%	50.0	6.0	10.0	20.0	15.0

※評定一致率：60.0%（12/20）

表4　筆記具の持ち方(ドイツB地域：Heiderberg)

	N	標準Ⅰ	標準Ⅱ	亜型Ⅰ	亜型Ⅱ	例外
初等1年	21	4	5	9	2	1
2016.6.13	%	19.0	23.8	42.9	9.5	4.8

※評定一致率：57.9%（11/19）

表5　筆記具の持ち方(ドイツB地域：Heiderberg)

	N	標準Ⅰ	標準Ⅱ	亜型Ⅰ	亜型Ⅱ	例外
初等2年	20	3	2	9	6	0
2016.6.13	%	15.0	10.0	45.0	30.0	0

※評定一致率：55.0%（11/20）

本研究では研究の倫理を遵守し、調査対象の保護者からインフォームドコンセントを得た者のみを「筆記具の持ち方調査」の対象とした。教師への面接調査から不適切な持ち方をしている子どもをもつ保護者が同意しなかった可能性もあるとの示唆を戴いた。したがって、実態を正確に把握するには悉皆調査を行う必要がある。現状では倫理上、保護者の同意のない子どもの調査は不可能のため、「正しい持ち方」以外のデータは控えめに評価すべきであろう。

2) ドイツの初等学校１年児童における筆記具の持ち方(研究３）

（目的）初等学校 1 年児童の学年末時点での筆記具の持ち方を明らかにする。指導者である教員から現状と課題を聴取する。

（方法）調査年月：2016 年 6 月。

調査対象：ドイツの Ａ・Ｂ２地域の初等学校 1 年児童 41 名と担任教師 2 名。

調査内容・手続き：デジカメ撮影が不許可のため、観察者 2 名が独立に教室内で筆記活動を行っている児童の持ち方の観察し、その結果を小野瀬（1996）の基準を基に記録した。調査後、担当教師から指導の現状と課題を聴取した。

（結果と考察）

ドイツのＡ・Ｂの２地域での結果を表３～５に示す。初等 1 年Ａ地域では「正しい持ち方(標準Ｉ）」と「それ以外」がそれぞれ 10 名と 10 名で検定の結果、人数の偏りは有意でなかった(p=.9999)。他方、初等 1 年Ｂ地域では4名と17名で人数の偏りが有意であった（p=.0072）。したがって、Ａ地域では「正しい持ち方」と「それ以外」に差はないが、Ｂ地域では「それ以外」の持ち方の方が多いといえる。また、表５は B 地域の初等２年の結果であるが、初等 1 年と同様、「正しい持ち方(標準Ｉ）」と「それ以外」がそれぞれ３名と 17 名で検定の結果、人数の偏りが有意(p=.0026）で「それ以外」の持ち方が多いといえる。

これについて、各学校の教師に面接調査を行った結果、児童の家庭等の背景に差があることが明らかとなった。すなわち、A

地域のような地方都市では、児童はほぼ全員ドイツ人である。ここでは、伝統的に、特に文字の読み書きは学校で教えるので、家庭では教えないのが伝統となっている。他方、都市部の学校では、児童の大半が移民の家庭の児童で構成される。

表6 筆記具の持ち方(日本のドイツ人学校)

	N	標準Ⅰ	標準Ⅱ	亜型Ⅰ	亜型Ⅱ	例外
初等1年	39	8	6	12	7	6
2017.3.16	%	20.5	15.4	30.8	17.9	15.4

※評定一致率:72.8%(28/39)

ドイツ人の児童と移民の児童の違いは、家庭で使用する言語にある。移民の児童にとっては、ドイツ語は第二言語となる。したがって、家庭で使用する言語と学校で使用する言語は異なるという現状がある。そのため、ドイツ語を第一言語として用いるドイツの初等学校に就学する前から、ドイツ語の読み書きを家庭で教えることが多いというのである。このようなドイツの初等学校における児童の構成の違いが、「筆記具の正しい持ち方」にも影響したものと考えられた。

3) 日本におけるドイツ人学校の児童における筆記具の持ち方（研究４）

（目的）日本においてもドイツ人のための学校がある。ここでは、ドイツ本国とまったく同じカリキュラム（レールプラン）に基づく教育が行われている。そこで学ぶ初等学校 1 年児童の筆記具の持ち方の現状を明らかにし、同時に、指導にあたる教師調査から指導の現状と課題を明らかにする。

（方法）調査年月：2017 年 3 月。調査対象：日本国内のドイツ人学校の初等 1 年の子ども 21 名と教師 1 名。調査内容と手続き：研究３と同じ。

（結果と考察）

表６のとおり日本のドイツ人学校では、日本と同様、「正しい持ち方」よりも「それ以外の持ち方」の人数が有意に多いことが明らかとなった（p=.0003）。担当教師への面接調査から、日本在住のドイツ人保護者は、いずれ本国であるドイツに帰国するため、帰国後、他の子どもと比べて学習が遅れることを懸念し、就学前から学習塾や家庭での指導が盛んとのことであった。つまり、学習環境としては日本と同じであることがわかった。就学前で「教科書の持ち方」以外の持ち方を修得し、定着した可能性がある。

4) ドイツの伝統校と移民校の児童における筆記具の持ち方の比較（研究５）

（目的）前述のドイツの初等学校 1 年児童を対象とした調査（研究３）の結果、ドイツ人を対象とした学校と、ドイツ人以外の移民の児童が大半を占める学校では、「正しい持ち方」の人数に差がみられた。そこで、教師への面接調査の結果、ドイツ人を対象とした学校では文字は初等学校で学ぶので就学前に家庭では教えないのが一般的とのことであった。他方、大半が移民の児童で構成される学校では、ドイツ語が第二言語であることから、就学前から学習塾や家庭で文字を教えることが多いとのことであった。このことから、他の地域でもドイツ人の学校では筆記具の「正しい持ち方」が多くみられ、大半が移民の子女で構成される学校では、逆に少なくなることが予想される。この「仮説」を確かめる。

（方法）調査年月：2017 年 11 月。

調査対象：ドイツ人児童の通う C 地域（ライプツィヒ）の２つの初等学校 1 年児童 23 名と 15 名と大半が移民児童の D 地域（フランクフルト）の初等学校 2 年児童 21 名。

調査内容・手続き：デジカメ撮影が不許可のため観察者 2 名が教室内で筆記活動を行う児童の持ち方の様子を観察し小野瀬（1996）に基づき記録をとることにした。

（結果と考察）

表７・８に示すとおり、ドイツ人児童の通う C 地域の 2 校では「正しい持ち方」の人数が「それ以外の持ち方」の人数に差がな

かった。他方、移民児童の通う D 地域の初等学校では「正しい持ち方」の人数が「それ以外の持ち方」の人数より有意に少ないことが明らかとなった（p=.0072）。

旧・西ドイツの都市（例えば、フランクフルト）の初等学校では移民の児童が多い。これは第二次世界大戦後の労働力不足を補う目的で受け入れたトルコ移民をはじめ、その後もルーマニア、ブルガリア、ポーランドからの移民を多く受け入れていることによる。そのため、移民の子どもの多い都市部とドイツ人の多い地方では、その割合も異なる。移民の児童にとってドイツ語は第二言語となる。したがって、家庭で使用する言語と学校で使用する言語は異なるという現状がある。

このような児童の現状や環境の差異がドイツ人の多い地域との差となって表れたものと思われる。

表7　筆記具の持ち方(ドイツC地域:Leipzig)

	N	標準Ⅰ	標準Ⅱ	亜型Ⅰ	亜型Ⅱ	例外
初等1年	23	14	3	1	5	0
2017.11.7	%	60.9	11.5	4.3	21.7	0

※評定一致率:83.3%(15/18)

表8　筆記具の持ち方(ドイツC地域:Leipzig)

	N	標準Ⅰ	標準Ⅱ	亜型Ⅰ	亜型Ⅱ	例外
初等1年	15	9	2	1	3	0
2017.11.8	%	60.0	13.3	6.7	20.0	0

※評定一致率:61.5 % (8/13)

表9　筆記具の持ち方(ドイツD地域:Frankfurt)

	N	標準Ⅰ	標準Ⅱ	亜型Ⅰ	亜型Ⅱ	例外
初等2年	21	4	0	4	10	3
2017.11.8	%	19.0	0	19.0	47.6	14.3

※評定一致率:57.2 % (12/21)

４．研究成果

〇日本とドイツでの「筆記具の持ち方調査」から、筆記具の「正しい持ち方」定着の条件として、書字指導の初期の段階から書くことの基礎･基本となる「正しい持ち方」で書く指導が重要であることが明らかとなった。

〇学校での指導では、教科書にある持ち方（標準Ⅰ）の定着を目標とするのが望ましいのは言うまでもない。今後の課題として、日本における小学生や大学生の実態から、「筆記具の持ち方の指導」の到達目標（目標規準）をどこに設定するかについて早急の検討が必要になる。

〇本研究で「例外」に分類された持ち方の学生から、授業時のノートテイクで苦痛を感じるとの報告があった。したがって、書字の入門期段階における筆記具の持ち方の指導の徹底と、異形ともいえる「例外」の持ち方の児童に対する矯正指導を行うことも考える必要がある。

（引用文献）

小野瀬雅人　1996　幼児・児童における被器具の持ち方と手先の巧緻性の関係
鳴門教育大学研究紀要　11,151-160.

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計２件）

①小野瀬雅人・鈴木慶子・千々岩弘一
日本応用教育心理学会第 29 回研究大会発表論文集　30-31 頁 2017 年。

②小野瀬雅人・鈴木慶子・千々岩弘一
日本応用教育心理学会第 27 回研究大会発表論文集　51-52 頁、2015 年。

６．研究組織

（1）研究代表者

小野瀬　雅人（ONOSE, Masato）
聖徳大学・児童学部・教授
研究者番号：40224290

（2）研究分担者

鈴木　慶子（SUZUKI, Keiko）
長崎大学・教育学部・教授
研究者番号：40264189

千々岩　弘一（CHIJIIWA,Koichi）
鹿児島国際大学･福祉社会学部･教授
研究者番号：90163724

（3）研究協力者

土山　和久（TSUCHIYAMA, Kazuhisa）
大阪教育大学・教育学部・教授